

人気女性ジャズ・ヴォーカリスト！ 山岡未樹

その魅力的な歌声、ステージトーク、明るい気さくな人柄で長く人気を集めているジャズ・ヴォーカリストの山岡未樹さん。8月22日に数々の名作を生んだ名テナーマンにしてジャズの巨匠、ベニー・ゴルソンさんとメールでやり取りしながら、最初にスタンダードを20曲くらい候補に挙げて、私の好きな曲とベニーさんが好きな曲を交えながら選曲しました。

取材 & 文：加瀬正之



トスタンダード集となった今回の選曲について

いつも一緒にやっているミュージシャンではなかったですし、凝った曲や新しい曲をやる時間がないということで、ベニー・ゴルソンさんとメールでやり取りしながら、最初にスタンダードを20曲くらい候補に挙げて、私の好きな曲とベニーさんが好きな曲を交えながら選曲しました。

♪『ディア・フレンズ』というタイトル

NYでレコーディングするのは3枚目なんですけども、3枚ともベニーさんが関わっているんです。1枚目の時は偶然にお願いしてお会いしただけだったんですけども、2枚目の時はベニーさんに音楽ディレクターをやって頂いたので、トランペットにエディ・ヘンダーソンがいたので、ベニーさんは楽器を吹かなくなりましたが、その時のピアノはマルグリュー・ミラーで、ベースはバスター・ウィリアムス。ドラムは新作でも叩いてくれるカール・アレンだったんです。今回はバスター・ウィリアムスが参加できなくてロン・カーターさんが参加してくれましたけど、前に日本でピアノのマイク・レドンにも会っていたことでもあって、私が『ディア・フレンズ』って考えたら、富谷さん（ローヴィング・スピリッツ取締役&プロデューサー）も「いいんじゃない！」って言ってくれてこれに決まりました。それで、ベニーさんに新作へのコメントをお願いした時に、本当に偶然に「ディア・フレンズ」って言葉が入っていたんです！このタイトルに決めて良かったって思いました。それに覚えやすいですからね。

♪レコーディングの雰囲気

みんな表情も険しくって、緊張感が漂ってビリビリしていましたね。スタジオは一日半取ってあったんですけども、結果的にリハーサルも含めて5時間半で10曲レコーディングしているんです。アトホームなんだからって、凄く緊張感お互いに「勝負してる」っていう感じでした。（「日本のスタジオで日本のミュージシャンとレコーディングするのって楽だった。ちゃんと仕事してくれるから。疲れたからこれで休憩なんと言わないんだもん。正にプロフェッショナルって感じだよな。日本の方がよほど気を使って嫌になっちゃう（笑）。本当に自分にとっては楽だった」という富谷さんのコメントからもプロの凄さを感じる）

♪巨匠ベニー・ゴルソンとの出会い

トミー・フラナガン（p）のトリオとベニーさんと10年前に『アイ・リメンバー・クリフワード』っていうアルバムをレコーディングしたんですけど、その時に何曲かテナーとか管楽器を入れた方がいって意見があって、トミー・フラナガンに匹敵する人って誰だろう？って考えていたら、「ベニー・ゴルソンがいいんじゃない

ない？」っていうことで、急遽ベニーさんに連絡をとってもらったら、ベニーさんも「トミー・フラナガンとレコーディングするの面白いよ！」って引き受けてくれたんです。それが最初の出会いですね。ベニーさんは普段はあまりミュージシャンっぽくないといいますが、優しいおじさんみたいな感じなんですけど、音楽に入るともの凄く厳しくなりますね。1年の半分はヨーロッパに演奏に行っているようで、その他にも学校で教えたり、たくさんのジャズ・フェスティバルに出演したり、テレビでの仕事をしたりと月に数日しか休みがないほど忙しい方なんですけど、肌も綺麗で歯も真っ白で年齢が分からないくらい若いんです（笑）。レコーディング中に私が「疲れた〜」って言っても、「大丈夫、大丈夫」って私の肩を揉んでくれたりもするんですよ！（右写真参照）

♪ロン・カーターとの初対面

あまり喋る人ではないって聞いていましたし、ミュージシャンの中でもいゆる「Hey! Ma-n」タイプの人ではないですよな。だから、最初はちょっと近寄り難いという雰囲気ありましたね。前にブルーノート東京でのライブでロンさんとベニーさんが一緒にいらした時に、ベニーさんに楽屋でロンさんを紹介して頂いたので、でもその時はまさか今回のように一緒にお仕事をするようになるとは思ってなかったです、ライブを聴きに行っただけだったので、「初めまして」という挨拶程度だったんです。でも、今回はお仕事で一緒になって、最初は何で言っていたのか分からなくて、とりあえず「宜しくお願いします」って言ったんです…。ロンさんにもこやかでもなかったんですけど、私のことをよく知らなかったでしよう、ベニーさんが私のCDをロンさんに渡して下さったんですけど、CDと実際に歌うのとは違ってますね。でもレコーディングが終わった後は、全然楽しかったです！ロンさんにはカリスマ性のオーラやレジェンドという雰囲気がありますよね。逆にベニーさんはロンさんみたいなカリスマ性のオーラではなくて、優しくほんわかとした感じなんです（笑）。

♪ロン・カーターとのデュオ「バードランドの子守唄」

この曲はレコーディングの当日に、『バードランドの子守唄』をやると思うんだけど、って私がベニーさんに伝えたんです。最初はベニーさんも、「本当にやるの？」っていう感じだったんですけど、「ロンさんと2人だけでやるのでみんなお休みです」って言ったら、みんな「ええっ」って驚いていました（笑）。それで、この曲はリハーサルもなくて、たった一回のテイクだけです！ロンさんも自分ももう一回くらいあるだろうって気



緊張感漂々レコーディングの合間に、末樹さんの肩を揉んであげるベニー・ゴルソン。ステージ上では見ることの出来ないジャズの巨匠の優しい一面。この互いの信頼感が名作・名演を生むのだろう。



ロン・カーターと打ち合わせ中の末樹さん



NYソーニー・スタジオの壁の前で記念撮影

持ちで演奏していたと思うんですね。後から歌の間のオブリガード聴いたら、「凄い！」って思ったんですけど、あの時は緊張感で分からなかったですね。レコーディングの最中は誰の顔も見れない状態だったので、お互いに呼吸を合わせるというか、息遣いを聞いていました。アルバムの中でも特に思っ深い曲ですね。(富谷さんもベニー・ゴルソンと共に「本当にうまく行くのかなあ」と半信半疑だったそうだ…。)「とりあえず良さそうだったらテープを回そうかって言っていて、キーは最初からスタジオ入った時に決めて、ある程度のリハーサルや音合わせがあってからスタートするだろうと思っていたら、とちとちええずロン・カーターがベースを弾き始めたんです。それで、「危ない！」って思ってテープを回し始めたから、途端にあそこからいきなりロン・カーターの音楽になったんです。途中とやめられるかなというのかなあって思っていたら、だんだん本気モードになって2人でそのまま行っちゃったんです。ですから、本当にこのワンテイクだけなんです。音の録り方としては昔ながらの一発録りの緊張感をそのまま残しながら録ったものなんですよ」…ジャズ・ファンならこの曲は絶対に聴かずにはいられない!)

♪ジャズ・ヴォーカルを教える立場として(末樹さんはジャズ・ヴォーカル教室の講師として14年目を迎え、現在『渋谷東急セミナー「BE」とカワイミュージックスクール青山』で100人以上の生徒を指導しているそう)一番大切なのは、歌詞を訳しながらどういう風に曲を解釈するかということですね。あと、基本的なことや私も習ってきたことは伝えさせてもらっているのですが、そこから先は本人のセンスだと思っんです。私が教えている生徒さんの中でプロのヴォーカリストになりたいって言う人は本当に僅かしかないです。働きながら歌っていきたくていう人は多いですけど、今はプロになっても食っていけないというのが現状なんですよな。だから、「プロのヴォーカリストとして生活していくことは難しいですけど、それに向けては一緒に勉強していきましょう」って教えています。

♪もしもジャズ・ヴォーカリストになつていなかったら？

多分、医者になっていたでしょうね。父が医者で、母が看護士で、ひとりっ子だったので、父は「お前は医者になる!」って言うていたんです。だから、人間か動物かは分かりませんが医者になっていたと思いますね。それが体育の先生ですかね。

♪将来の夢や共演してみたいアーティスト

女性の声と合うかは分かりませすがトウーツ・シールマンスとか、あとパット・メセニーとか、いろいろなミュージシャンと一緒にやりたいですね。今回のアルバムのようにスタンダードでセッション的なものもいんですけど、リハーサルにきちんと時間をとってアレンジなどを練ったものもやりたいですね。一回だから上手くっていう曲もありますけど、何回も歌いたいっていう曲もあるんですね。音楽をやる限りはいいミュージシャンとお互いの心を理解しあって、感じながら演奏をしたいと思っていますし、ずっと前からヴォーカルだからと言ってバンドの方に歌の伴奏を

して頂くっていうのは好きではなくて、ヴォーカルは言葉があるだけ得な部分がありますし、そういう部分を大切にミュージシャンの方たちと歌と楽器同士でおしゃべりしながら一曲ずつ作っていきたくなんです。例えば、私がこう歌うとロン・カーターさんがベースでこう答えてくれるような…。みんなが喋っているような状況が理想ですね。だから日本で歌っても外国で歌っても自分のスタンスは何も変わらないんです。ただ、やはり世界でこの人と言われている人と手合わせをしたっていう気持ちはありますし、それはミュージシャンとして当然の夢だと思いますね。

♪ジャズの未来について

ジャズって凄く難しい音楽っていうイメージを持たれている方も多いと思うんですけど、もっと気軽にそこかかってもらえるようにミュージシャンの方もお客様に対して努力していかねければならないですね。まずはお客さんに聴きに来てもらえるように努力して、来てもらったらまた次も聴きに来てもらえるように努力しないといけないと思うんです。これは日本だけでなく世界中心でも同じだと思います。アメリカに行った時にトミー・フラオガンと一緒にやっていたピーター・ワシントンというベーシストがたまに自分のライブをやるって言うて見に行つたのですが、お客さんに来てもらうために電話したりメールを出したり凄く大変そうて、ライブの休憩時間もメンバー全員が「来てくれてありがとう!」ってみんなで客席を回っているんです。本場のアメリカのミュージシャンでさえそれくらいしないといけないくらい世界中のジャズ・ミュージシャンみんなが大変な状況なんですよな。だから、そういう風にミュージシャン側もしていかないとダメなんですよな。あと、外国のミュージシャンだけが良いていう風潮はよくないと思いますね。ヴォーカリストは言葉のハンディがありますが、ジャズの世界でも日本のミュージシャンって本当に水準が高いですし、外国でも絶賛されているんです。本当に演奏する側、聴く側、紹介する側などみんなと一緒に頑張っていければ、ジャズももっと良い方向に向かっていきたいと思いますね。

【山岡末樹のホームページ】

<http://www.geocities.co.jp/Hollywood/7616/>

山岡末樹、ニューヨーク録音第3弾!



ディア・フレンズ 山岡末樹

ベニー・ゴルソンプロデュース!

ローヴィング・スピリッツ: RKJC-2031

¥2,800 (tax in)

2007. 8. 22 In Stores!

【P11のジャズ新譜紹介コーナーもご覧下さい】